

「恵みの荒れ野」

マルコによる福音書 1 章 4～8 節

政治経済学部特任チャプレン 洛雲海(ナグネ)

皆さんは、荒れ野と聞くと、どんなイメージを思い描かれるでしょうか。いろいろでありましょう。しかし、神さまを信じる人にとって、荒れ野は恵みの場です。もちろん、そこは具体的であれ抽象的であれ人気がなく、手入れされたまっすぐな道もなく、地面はでこぼこしており、平らな道もないことでしょう。岩や砂利ばかりで、時に道といえるものさえないことでしょう。ただ歩いて行くことだけでさえ難儀な所、荒れ野です。しかし、荒れ野では、きっと自分のことを深く振り返ることになります。そしてこれまでの自分の生き方に思いを向けることになりましょう。そして良かったこと辛かったことを思い、自分の犯してきた罪を思うことになりましょう。しかし、そこでは罪の赦しが起こり、癒しが起こり、救いが起こることでしょう。その時、誰もがきっと思い至るはずです。

マルコによる福音書は、旧約聖書に記された預言が成就したということから書き始められました。旧約聖書の預言どおり、荒れ野に人が現れたというのです。洗礼者ヨハネと呼ばれる人です。この人の父親は神殿に仕える祭司でした。ザカリヤと申しました。母親はアロン家のエリサベト、やはり祭司の家系です。つまり、洗礼者ヨハネは、父方も母方も神殿に仕える祭司の家系に生まれた人で、いわば生まれたときから祭司となることが決められていたような人でした。

しかし、どういう経緯からか、ヨハネはその祭司となる道を離れて、別の道へと進みました。ルカによる福音書の初めの部分から知らされるのは、このヨハネが、いわゆる祭司の枠にはおさまらないような生き方をする人として、預言されていたことです。「イスラエルの多くの子らを、主のもとに立ち帰らせる」と記されています。ところで、ヨハネの母親のエリサベトは、ヨハネを身ごもる前、すでに高齢に達していました。父親のザカリヤも同様に、高齢でした。そんなザカリヤに天使ガブリエルが現われて、あることが告げられました。ザカリヤは男の子が与えられると告げられたのです。

天使ガブリエルは言いました。「あなたの妻エリサベトは男の子を産む」(ルカ 1:13-17)と。

その預言は成就しました。すでに高齢となっていたエリサベトに男の子が生まれたのです。この子は祭司の家系に生まれましたが、親や祖先たちのように祭司として神殿に仕える人生を歩もうとはしないで、荒れ野へ向かう者となりました。親や一族に大きな反抗をして家を出たのかもしれませんが。ヨハネは祭司として聖なる神殿にはなく、荒れ野へと向かって行ったのです。

荒れ野とは申しても、そこはいわゆる〈水なき砂ばかりの砂漠〉のような所ではなかったようです。イスラエル地方に旅したことのある方ならご存知かもしれません。わたしはイスラエルに行ったことがありませんのでよく知りませんが、聞くところによりますと、荒れ野には確かに岩や石がごろごろと横たわっているそうです。しかし、緑が全くないわけでもない。そこには川もあります。ヨルダン川です。それでもそこは荒れ野と呼ばれました。人が住みつかないのです。街のような活気に溢れ、生活の匂いがするような所ではないのでしょうか。そのような所にヨハネは現れたのでした。すると、ヨハネのもとへ多くの人々がやって来たそうです。

ちょっと想像してみてください。不思議な光景が眼前に広がります。人気のないはずの荒れ野に、多くの人々が集まってくるのです。それは荒れ野らしくない異様な光景だったことでしょうか。ヨハネの装いはどうでしょうか。これも異様です。らくだの毛衣を着て、腰には革の帯をしめていたそうです。その様子は、祭司階級の人の立派な装いとはかけ離れていたことでしょうか。そんな恰好で、いなごや野蜜をむしゃむしゃ食べているのです。

ヨハネは荒れ野で何をしていたのでしょうか。大勢の人たちから「罪の告白」を聞いたのでした。ただ聞くだけではありません。また罪の赦しを得させていました。ヨハネは、これまで生きてきた自分の生き方を心から悔い改める人々の声を聞いて、赦しを得させるために、水で洗礼を授けていたのです。そこが荒れ野でした。そこで思うのです。荒れ野とは何でしょうか。自分自身を省みるころです。そして自分の罪に思いを向け、罪を告白するころです。しかし、その先があります。罪の赦しを受けるころです。

それにしても、なぜヨハネは祭司たちが仕える神殿やら、人々がたくさん往来する街中(まちなか)に現れなかったのでしょうか。罪を告白するということは、神殿とか街中では難しかったからではないかと考えさせられます。自分のことを真摯に振り返り、犯してきた罪に心に向け、その罪の告白が起こるためには、そして本当に悔い改めが起こるためには、虚飾に満ちた自分というものを捨てなければなりません。まず赤裸々な本当の自分を見つめるということがなければなりません。他人(ひと)の目を気にしている限りそれは無理でしょう。神さまの前に立って、裸の自分を見つめる必要があります。人々の前で少しでも自分をよく見せたいと思うような思いから自由になってこそ、神さまの前で本当の自分をさらけ出すことができるようになるのです。その時見えてくるのは、罪にまみれた自分です。

人々はヨハネのもとにやってきて罪を告白しました。きっと具体的に犯した罪を告白したことでしょう。そして、ヨルダン川で洗礼を受けたのです。聖書には「悔い改めの洗礼」と記されています。

洗礼者ヨハネは、この悔い改めの洗礼を受けるよう宣べ伝えていました。罪を告白するとは、まず神さまに背を向けていた自分を認め、神さまなどいないかのように生きていた自分を認めることから始まります。そのような自分を認めたら、それを独り胸の中にしまっておくのではなくて、これを告白する

のです。そして、神さまに立ち帰るのです。そのような出来事が、道無き荒れ野で、ヨハネのもとで起こっていたのです。

荒れ野は恵みの場です。悔い改めが起こる場だからです。そこは人が好まない場でありましょう。いわゆる美しい場でもないことでしょう。しかし、そのような荒れ野でこそ起こることがある。自分自身を深く省みること。特に、自分の罪に思いを向けること。そして、悔い改めること。神さまに顔を向けることです。その時、悔い改める人には、赦しが与えられます。

イエス・キリストも荒れ野に赴かれました。そして、荒れ野で洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになりました。荒れ野はキリストも赴かれた恵みの場です。私たちも荒れ野に赴くことになる時があることでしょう。今、まさに荒れ野の中で過ごしている方もおられるかもしれません。そこで自らを深く振り返ってみるのです。それは辛いことではありますが、どうか落胆せず、回避せず、希望を持ってください。悔い改めがなされる時、そしてイエスさまを通して救いを求めるとき、必ずや赦しと癒しが起こることでしょう。荒れ野は恵みの場となるのです。

お祈りします。

天の神さま

荒れ野の厳しさ、辛さ、困難をおぼえます。

しかし、荒れ野の恵みをも思います。

荒れ野としか言えないような時を過ごすことになったとしても

そこで自らを振り返り、悔い改めて、あなたに立ち帰る者となれますように。

そこであなたの赦しと癒しと、あなたが共にいてくださる恵みとを深く味わうことができますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン

2024年6月6日 聖学院大学全学礼拝